



私の出身地・千葉県だ。それ故、醤油の町も醤油づくりが盛ん。湯浅には前々から親

熊野古道 くらくと記

42

しみを持っていた。訪問はまず町の北部に位置する熊野古道沿いの逆川王子から始まつた。道はここから湯浅の町のど真ん中を通って広川に抜けていく。方津戸峠に立つと

軒先に「麹屋」の看板がある北町の入り口に立つと、江戸、明治、大正の歴史的建造物がずらり。土間のある金山寺味噌店の女主人は割烹着姿で応対してくれた。更に進むと

985(昭和60)年までれんが自に入り、社長と奥さんが迎えてくれた。創業から170年以上を経た工場は、昔ながらの木造建築で高さ2.5mもある吉野杉の仕込み桶が正面に居座り、手づくり一筋を誇っていた。とりわけ感動したのはもうみ藏で活動したのはもうみ藏での発酵・熟成工程である。もうみを仕込んだ桶が立ち並ぶ天井から

出合った。中央に目を向けて事業を展開した湯浅の商人魂をみた。文献によると、平安後期に台頭した湯浅氏は、鎌倉時代に盛んになった熊野御幸の紀伊から田辺までの警護と

援助で醤油産業が米え、援で醤油産業が米え、廣域化した。海運と共に漁業と漁網製造が盛んになり、商工業都市として発展した。今日の湯浅は過去の歴史を包含しているので、醤油の町というよりは、

麹文化の町・湯浅

絵と文・熱田親憲 題字・熱田秦華

と、角の立石道標にぶつかった。脇に熊野詣での安全を願う護摩焚き場があり、当時の立石道標を少し西に移しておいた。由良・興國寺の覺心が宗(中国)から金波(1854年)の記念碑が建ち、後の人への戒めが書かれていたのが、目に新鮮だった。

と、角の立石道標にぶつかった。脇に熊野詣での安全を願う護摩焚き場があり、当時の立石道標を少し西に移しておいた。由良・興國寺の覺心が宗(中国)から金波(1854年)の記念碑が建ち、後の人への戒めが書かれていたのが、目に新鮮だった。

なく、上覧や明惠上人を神護寺に送り、京都での窓口の役割を持たせた。したたかな政治

家だ。鎌倉時代になる

こと

自然や人材を発酵・熟成

「手づくり醤油」ののれんが自に入り、社長と奥さんが迎えてくれた。創業から170年以上を経た工場は、昔ながらの木造建築で高さ2.5mもある吉野杉の仕込み桶が正面に居座り、手づくり一筋を誇っていた。とりわけ感動したのはもうみ藏での発酵・熟成工程である。もうみを仕込んだ桶が立ち並ぶ天井から

風呂前の小路を左折して辻に入り御蔵町に。すると白壁の蔵・倉庫が並び、商工都市の面を垣間見た。再び熊野へ向かう道町に出る。一方、湯浅氏は京都に鯉まろき味秦華